



昨年12月、書家・小山梨風先生の書作展がありました。静かな一室に、冬の空の星のように、見る人の心に静かにしみわたってくる作品の数々がたたずんでいました。

その中には、小山先生が20歳の時に一おそらく書家として歩み始めたばかりの頃に一書かれた作品がありました。さらに、小学校4年生の時の書初めの作品も展示されていました。それらを見ながら、私は「小山先生は自分の歩んできた道を大切に生きている方なんだなあ。」と思いました。

明日への希望を胸に ～校内書初め大会～

昨日、その小山先生をお招きして、校内書初め大会を開催しました。

そして、いざ筆を持ち、膝をついて一斉に紙に向かう子どもたちを見た時、（あ、小山先生に似ている。）と思いました。姿かたちというよりも心構えが、です。

「笑顔の年に」「伝統を守る」「絆を深める」「夢を語ろう」……。体の重みを一本の筆に預け、紙に伝えているのは、自分の思いです。そうして生まれた作品の筆跡がやわらかく輝いて見えるのは、ふくよかな墨のせいだけではなく、きっと子どもたちの気持ちの深みです。



1、2年生は教室で、フェルトペンで書初めをしました。入学して平仮名を覚え始め、まだ1年も経っていない1年生が、ペン先を紙にぐっと押し付け、真剣に文字に向き合っています。2年生は数か月後には筆を持ちます。きっと、もう筆に憧れをもっていることでしょう。そして、今の3年生のように、きっとすぐ上達するはずです。

意味を伝えるだけならばすぐに書けてしまう数文字を、子どもたちは15分の時間をかけ、思いを伝えようと書き上げました。

小山先生には2年間、本校に来ていただき、書道パフォーマンスで、白い紙の上に生み出されてくる文字に、子どもたちは憧れてきました。でも、本当は、文字の美しさだけではなく、「文字に思いを込める」という根源的なことを、その姿から教えていただいていたのだと気付きました。

テレビ局のインタビューに、ある男の子が答えていました。「小山先生のパフォーマンスは、やっぱりきれいで、文字に思いが込められていてすごいなと思いました」。まさしくそのとおりです。



前日の夕べを思い返して



書初め大会前日。子どもたちが習字道具を並べて帰った後の体育館には、夕陽が斜めに差し込んでいました。静寂にして幽玄。期待感を含みながらも空気が張り詰めるこの雰囲気と、昨日の書初めの雰囲気は同じでした。

静けさの中に身を置き、筆先一点に集中する。その心地よさを知ることも、書を学ぶ醍醐味と言えるでしょう。